

光といのち

第97号
— 報恩講 —
2015年11月10日発行

発行所
真宗大谷派勝善寺
〒299-2214
千葉県南房総市二部1344
電話 0470-57-2657
FAX 0470-57-2290
Eメールino-teyy@khaki.plala.or.jp
住職 井上孝昌

報恩講

十一月二十一日(土)

受付 九時三十分から
法要 十時二十分から

住職挨拶

責任役員挨拶

紙芝居『勝善寺の飛び石』

語り手 朝倉淳子さん

勤行

休憩

法話

了因寺住職吉岡康裕 師

諸連絡

お斎(食事)



新設駐車場 20台から30台駐車できます。

他力の信心うるひとを

うやまいおおきによろこば

すなわちわが親友とぞ

教主世尊はほめたまう

題字下の和讃は、『正像末和讃』一一四首のうちの一首です。当寺の報恩講では、「正信偈」に続けて和讃を六首をお勤めしますが、その五首目です。

「念仏の信心を得た人は、仏法を篤く敬いそれに遇えたことを慶んでいるので、教主としてお釈迦様は、その人を私の親友であるとお誉めくださる」という意味です。

80歳を過ぎた親鸞聖人が、本願念仏の信心に歩んできた人生を慶び、こう詠んだのです。

「わが親友とぞ 教主世尊はほめたまう」とあります。これは『仏説無量寿経』の「法を聞きて能く忘れず、見て敬い得て大に慶べば、すなわち我が善き親友なり」との教えを親鸞聖人がいただいた言葉です。

『仏説無量寿経』は、「たとい世界に満てらん火をも、必ず過ぎて要めて法を聞かば、会らば當に仏道を成すべし、広く生死の流れを度せん。」と続きます。

「世界に満てらん火をも」は、思いどおりにならない現実が次から次へと起こってくる私たちの生活のことです。燃えさかる火のように怒りがこみ上げてくるその生活が、「私」とってはまるで世界中に火が満ちているようだという事です。その現実から逃げずにそれを引き受けて仏法(本願念仏)に出遇えたら、お釈迦様と同じ覚りを成し、煩惱に翻弄されることはありませんという意味です。

仏教は、奇跡を起こす教えではありません。

仏教は、教えを学び自己満足に浸る教えではありません。

仏教は、人格を高める教えではありません。

仏教は、願い事を叶える教えではありません。

仏教は、厄除けをする教えではありません。

仏教は、心の病を治す教えではありません。

仏教は、社会問題を解決する教えではありません。

(救済の七ヶ条「出雲路暢良師参照」)

仏教は、思いどおりにならない現実を生きる、覚悟と勇気をいただく教えです。

その仏教、浄土真宗を開頭された親鸞聖人に報恩感謝するご門徒の集いが、報恩講です。

『御伝鈔』は、親鸞聖人の生涯を讃える絵詞『親鸞伝絵』の詞書の部分を巻物にした上巻八段下巻七段からなる物語です。作者は聖人の曾孫、覚如上人です。今回の上巻第六段目は、生き生きとした浄土往生の人生（浄土真宗の安心）は、阿弥陀の本願にめぐりあうこと（「信不退」）によるのか、それとも南無阿弥陀仏となえる自分の努力（「行不退」）によるのか、ということがテーマです。

親鸞聖人の提案により、法然上人の吉水禅房に集まる三百余の門弟が、「信不退の座」あるいは「行不退の座」に一人ずつ着座することになりました。ほとんどの方々が態度を決しかねていましたが、親鸞聖人を含めわずか四人が「信不退の座」に着きました。そして最後に、法然上人もその座にお着きになったという内容です。

これは親鸞聖人が、法然上人に師事して四年が過ぎた頃、聖人33歳の出来事です。

『御伝鈔』では「第七図」になります。

『御伝鈔』第六段 意識

法然さま在世のころ、どんな人でも必ずよみがえらせずにはおかない、という阿弥陀の親心のこめられた念仏の教えが説き弘められると、今まで仏教の救いなどとても望めないと思っていた人々は、こぞってこの教えに注目し、先を争ってこの念仏の教えに耳を傾けるようになりました。

殿上にあつて、まつりごとにいそしまれる尊い方々も、栄華をほしいままにしている由緒正しい大臣家にあつても、この世の幸せは夢、幻にすぎないのですから、ひとたび自分の人生を真剣に考える者は、阿弥陀如来の本願のことを口にしない者はありませんでした。

それどころか、人里離れた遠い地方の人々、あるいはその日暮しに追われて貧しい人々も、こんな私がよみがえる道があつたのかと喜び、この教えを仰ぎ敬うのでありました。身分の上下にかかわらず、法然さまのもとへ訪れる人は垣をつくるほどになり、あたかも門前、市のようになりました。いつも法然さまのおそばで教えを受ける僧だけでも三百八十有余名もあつたと伝えられています。

しかしながら、法然さまの教えをほんとうに、自分の生きるともしびとしてうけたまわり、その心を正しく聞きひらいた人は、ということになると、その数はわずかに五、六人しかいなかったといつてもよいのでしよう。

あるとき親鸞さまは、「私は、特別な能力の持ち主しか歩めない難行道に見切りをつけて、いつでも、どこでも、だれでも歩むことができる易行道に目覚め、聖者のための教え、聖道門では、私のような者は救われないことを知って、どんな愚か者でも必ずよみがえらせずにはおかない、と約束される浄土門に身を置くようになってからは、もし、如来の本願に気がつかなかつたら、私のような者は、一生暗い迷い路をさまよい歩かなければならなかつたであろう、としみじみ思うようになりました。私にはこれ以上の喜びはありません。しかし、いま同じ道を歩み、同じ先生の教えを受けて

いる人は多いけれども、ほんとうにみんなが明るい生き生きとした浄土往生わうじゆうの人生を歩んでいるのかどうか、ということになると、私もそうですが、みんなもよくわかっていないのではないのでしょうか。

だから、だれがほんとうの永遠の友であるか知るためにも、あるいはこの世の思い出ともなるように、先生のお弟子が集まった折に、みんなに提案して、おたがい心の世界を確かめてみようと思うのですが、いかがなものでしょうか」と、法然さまに申しあげますと、法然さまは、「なるほど、それはおもしろい。さっそく明日、みんなが集まったら提案してみるのがよい」と、おおせになりました。

そこで、次の日の集いるとき、親駕さまは「さあみなさん、今日は、阿弥陀如来の本願にめぐりあうことによって、明るい生き生きとした人生が約束される（信不退）と信じる人は、どうぞこちらの席へ、また、自分が南無阿弥陀仏と口にとなえる努力によって、明るい生き生きとした人生をきずきあげることができると信ずる人は、どうぞあちらの席へおすおりください」と、提案したところ、そこに居あわせた三百有余名のお弟子たちは、おたがいに顔を見あわせてしりごみするばかりでした。

そのとき、聖覚さま、信空さまの二人が、すつくと起ちあがり、「信の座につきましよう」といわれました。次に遅れてやってきた法力房熊谷直実が、「善信（親鸞）のご房よ。いったい何を書いておられるのですか」とたずねたので、親鸞さまは、「今日は、生き生きとした浄土往生の人生は、阿弥陀の本願にめぐりあうことによるのか、それとも南無阿弥陀仏と

となえる自分の努力によるのか、という二つの意見によって座席を分けているのです」と、説明しました。すると法力房は、すかさず、「ああそういうことですか。それでは私も見捨てられたらかなわらないから、信の座につきましよう」と、信の座にすわりました。そこで親鸞さまはそのように名を記しました。

あとの数百名のお弟子たちは、それでもまだ、ぐずぐずしていて、一言も述べようとはしませんでした。これはおそらく、念仏の教えを誤解し、他力の信心とはどういうことなのか、まだよくわかっていなかったからではないのでしょうか。人々が無言のまま、ためらっているうちに、親鸞さまは、信の座に自分の名を記されました。

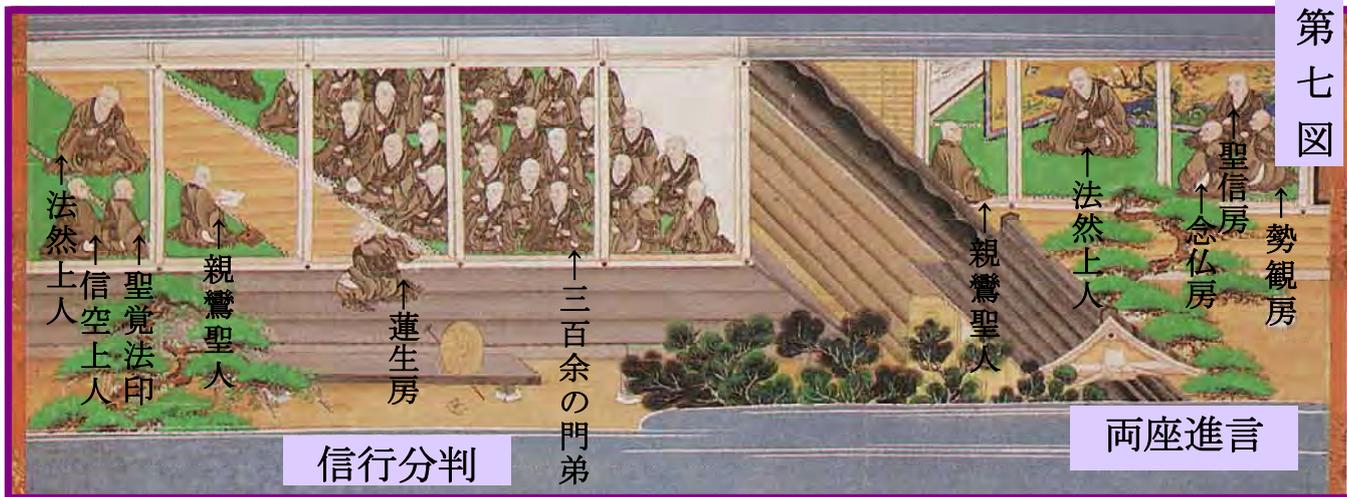
ややしばらくして、先生の法然さまは、「私も信心の座につきましよう」と、おおせになりました。

そのとき、そこに集まっていたお弟子たちは、ある者はだまって頭をさげ、自分のいたらなさを恥じ、また他の者は、後悔の色をかくせませんでした。

『親鸞聖人伝絵——御伝鈔に学ぶ——』東本願寺より

教えを聞く、ということでも、なれると、何でもわかったつもりになる。そうなると、どんなすばらしい教えに出会っても、何の感激もなくなる。私たちは、いつもこの信不退、行不退のどちらを向いているのか自分の胸に問わなければならぬのです。

（『親鸞聖人伝絵——御伝鈔に学ぶ——』東本願寺より）



両座進言

信行分判

報恩講には、本堂の余間に『御絵伝』を掛けます。これは親鸞聖人のご生涯を描いた四幅二十図の絵巻物です。親鸞聖人の曾孫になる覚如上人がお作りになった聖人の伝記『御伝鈔』に対応して描かれています。

本年はその第七図を掲載しました。親鸞聖人33歳、法然上人に師事して四年後の出来事が描かれています。

右側の「両座進言」は、親鸞聖人が法然上人に「先生のお弟子が集まった折りに、みんなに提案して、お互いのこころの世界を確かめてみようとおもうのですか」と、申し上げているところです。

法然上人は「なるほどそれはおもしろい。さっそく明日、みんなが集まったら提案してみるがよい」とおおせになり、左側の「信行分判」に場面が移ります。次の日の集いの折りに親鸞聖人は二百余りのご門弟に、「信不退の座」あるいは「行不退の座」に一人ずつ着座するようにと提案したのでした。親鸞聖人は、「ただ念仏して、



「第七図」は右から二軸目、下から二番目です。

弥陀にたすけられまいらすべし」と法然上人から教えられました。三百八十余のご門弟も同じくその教えられたことでしょう。では、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」とは、どういうことなのでしょう。

阿弥陀如来は念仏申す者をもれなくすくうことを本願としていますが、その本願にめぐりあうことよって、明るい生き生きとした人生が約束される（信不退）のか、自分が南無阿弥陀仏と口に称える努力によつて、

あかるく生き生きとした人生をきずきあげることができ（行不退）のか、法然上人に教えられたお言葉には、この問題が含まれています。

法然上人に念仏申す生活を勧められ実践しているが、自分の申している念仏は、阿弥陀如来の本願にめぐりあつて称えている念仏（信不退）なのか、阿弥陀如来の本願をたのみにして申している念仏（行不退）なのか、ということなのです。

念仏申す生活をしている者にとつて、これは簡単に二者択一できる問題ではありません。三百余の門弟は、その意図がよく理解できず態度を決しかねていたところ、聖覚法印、信空上人、蓮生房（『御伝鈔』では法力房）熊谷直実、そして親鸞聖人の四人だけが信不退の座に着きました。

「信行分判」の図は、お出ましになった法然上人が、信不退の座に着いた場面です。このことは、他人事ではありませんね。

念仏申す生活をさせて頂いている「私」の問題です。